

ほしが うたっている (寮 美千子/作)

▼1

うたう。
ぼくが うたう。

▼2

でも ひとりじゃない。
うたっている。
とりも うたう。
ねこも うたう。
いぬも うたう。

▼3

ちいさなむしも うたう。
おおきなぞうも うたう。
いきているものは みんなうたう。
なんて おおきなうた!

▼4

ほら こうもりだって うたっている。
でも きこえない。
どんなに みみを すましても きこえない。
そのこえは たかすぎるから。
くじらだって うたっている。
でも きこえない。
そのこえは ひくすぎて。

▼5

おとは なみ。
くうきの なみ。
たかいおとから ひくいおとまで
どこまでも おとはある。
ひとのみみに きこえるのは
そのなかの ほんのすこしだけ。

けれど

きっと どこかで うたっている。
こうもりも くじらも。

▼6

そのすべてが きこえたら
ちきゅうは

どんなおおきなうたを うたっているだろう。

▼7

ひかっている。
ほしが ひかっている。
まるで うたうように。

▼8

ひかりも なみ。
しんくうを つたわる なみ。
ちいさなさざなみから おおきななみまで
どこまでも ひかりはある。
でも ひとのめに みえるのは
そのなかの ほんのすこしだけ。

まっくらにみえる うちゅうにも
みえないひかりが みちている。
もし それが みえたら
ほしぞらは どんなふうに みえるだろう。
みたい。
みえないものを ぼくは みたい。

▼9

それを みるために
ひとは こんなものをつくった。
「でんぱ ぼうえんきょう」
そらに みちる みえない
ひかりを みるための め。
きこえない おとを きくための みみ。

ほら しろい かいがらみたいだろう。
そらを みつめている。
そらに みみを すましている。

▼10

そうしたら みえてきた。
ほしの みえない まっくらな うちゅうに
とほうもなく おおきな くもが あることが。
ひかりの はやさで
なんびやくねん はしりつづけて
やっ と むこうに たどりつく

そんな きよだいな くもが
うちゅうの かなたに ある。
そのくもは とても つめたい。
くらい うちゅうに ちらばった
ちりの かけらだ。

▼11

けれど かけらは ひきあう。
いんりよく という ちからで
たがいに もとめあうように。
そして ちぢまり こい くもに なる。
すると あつくなる。
もっと あつくなれば
やがて ひかりはじめる。
ほしが うまれるんだ。

でも まだ みえない。
いまは みえない。
けれど でんばなら みえる。
ほしが うまれるところが。
ほら これが それだよ。

▼12

ほしだって いつか どこかで うまれた。
そして いつか なくなる。
ずっと むかし
もえつき ぼくはつして
しゃぼんだまみたいに とびちった
ほしの かけらが でんばで みえる。
そのまんなかになんかとうだいのように
くるくる まわって でんばを だしている
ちいさな ほしも みえる。
まるで
「ぼくは ここにいたよ。
むかし ここで ひかっていたよ」
と はなしかけるように。

▼13

とびちった ほしは もう いない。
けれど そのほしの かけらは
うちゅうを ただよう ちりになり

どこかで おおきな くもに であい
まじりあい また いつか ほしになる。

ぐるぐる まわっている。
ほしも うまれて しんで また うまれる。
うちゅうは ぐるぐる まわっている。

▼14

そうやって
ぼくのいる この ちきゅうも できた。
ずっとむかし うちゅうのどこかで
かがやいていた ほしのかげらが
あつまって ちきゅうになった。
その ちきゅうから いきものが うまれた。

▼15

だから
ぼくたちは みんな ほしのかげらだ。
とりも ねこも いぬも
むしも ぞうも こうもりも くじらも。
みどりの もりも
しろい くもも
あおい うみも
みんな ほしの かけらだ。

▼16

うたう。
ぼくが うたう。
でも ひとりじゃない。
ひかっている。
ほしが ひかっている。
まるで うたうように。

▼17

ぼくは うちゅうに
そっと みみを すます。

『ほしがうたっている』
寮美千子／作 高橋常政／絵
思索社 1992